

平和の理念

一、平和の意味

平和といふ言葉の意味の混乱について、原爆の要がある。単に戦争してゐない（戦争の欠如状態）といふだけの消極的な意味の言葉。

←
そのことか、価値や目的と成り得る積極的な意味の言葉に転化してゐるの否を問ふ。

・人々内部に転化の危険は常に存在してゐる。

・米りの対立、核兵器の発明が戦争の性格を一変させたことか。戦争の欠如状態そのものの価値あるものではないかと考へられる。

二、最高価値としての平和

平和を守らうとする意思や行動の価値
平和そのもの、状態に過ぎず、価値ではない

→ 混ぜ
混同したか

① 憲法にある、武装放棄、完全軍廃

これは、敗者の謝罪の意を示すだけの消極的性格を持つにすぎないか、理想を表明した積極的性格を持つものと、自己正当化してしまつた。

② 原爆の被害を受けた初め、唯一の国民

・原爆投下は、終戦のための天子のマサトシ、生きたという
→ 操り人形へ
エゴイズム

・原爆被災国たる特殊意識 → 殉教者の使命感
ヒューマニズム

③ 修身科（道徳教育）の廃止

・天皇制といふ一元論を支へられてゐた諸徳目に代つて、平和と民主主義といふ二つの理念の、国民道徳の根幹を成すところ定められた。

・諸君、下位の徳目は教育不能のため、中心義以上の抽象性と絶対性を以つて、児童・学生に君臨する。

・さらに政治的概念と道徳的概念との撞り対目へは、
戦前以上に一元論的絶対主義を助長する。

平和は最も高価な価値↓生命は最も高価な価値

⇐

ヒューマニズムとエゴイズムとの撞り替へ、混同

右の①②③に見られる エゴイズムとヒューマニズムとの
撞り替へ、自己正当化、こそは、日本人の道徳感を
頽廢に導いた「元兇」と言へよう。

三、知識人と平和運動

日本の平和運動の指導者は、進歩主義者知識人である。
戦後日本の彼らには、固有の性格がある。

それは、戦時中、権力者に対して無力であったという後ろ
めたさから、戦後、その己の非を表明し、償ひをせねば
ならぬという衝動にかられたという点である。

① 知識人の戦争責任論

② 危機感の鼓吹

③ 戦前の過ちを二度と繰返すまいといふことに知識人と
しての面子を賭けてゐる

平和は進歩主義の象徴、平和運動は知識人の
復権運動

④ 日本が近代国家として未成熟であるといふ根本的な
弱点から、知識人、大衆を問はず、表れてゐる。

← 個人的エゴイズムと国家的エゴイズムが両立し得、

この二つのエゴイズムの抗争、さらにその背景で
この二つのエゴイズムが宗教的良心と抗争するといふ
試煉の下で近代国家が成長していったといふ
考へ方が、できない。

← 進歩主義的知識人。反権力的知識人は、自分達か近代国家集団としての自由主義陣営に属する者としての自覚が甚だ微弱だ

← 個人と国家の二元論や国家と国家集団との二元論が認められぬ土壌の上に平和と戦争の二元論が成り立ち得るか、これが五十年の最も困難な問題である。

四、冷たい平和

自由主義陣営における 絶対主義的平和思想への疑問、自由より平和を、ラッセルの主張は、一方の軍縮論といふ平和思想であるか、これは、核兵器による全人類の滅亡と恐怖感から生れた敗北主義だ。

自由の精神が道徳に關する恠便と制度上の政治的概念に平和の政治的概念と生命の保存と生理的概念に

① 人類滅亡との暗示 銀的脅迫は、觀念的、空想的であり過ち、ここから、有知かつ具體的な行動は生まれない

② 平和運動は反権力的破壊行為であり、利敵行為だ、国内政争の手段に利用され、より好戦的政府を出現させかねない。

③ 軍縮・軍廢が可能であつたにせよ、冷戦状態は続く、無と均等化は、世界を不安定化する。



核兵器、二元陣営の対立、技術文明の進歩の三つから我々、平和觀の再考を要する。

今日、平和とは戦争と、平和共たを意味する。我々は戦争そのものの、あるものは戦争に對する猜疑や恐怖との暗闘を続けて行かねばならない。

絶対平和主義の根幹を成す物の考へ方は、日本のみならず世界の文明の底流として、種々の思想の交流を自ずから無抵抗に望む平野を滔々として流れて行くであろう。

← 自由主義・民主主義の危機は非しがある

文明の進歩の絶対的平和主義を産んだ

← 道徳上の問題 ↓ 政治上の問題 ↓ 制度・法律上の問題

「平和」 途方もなく出せ、

「自由」 ひどく落つゝぬれ、

↓ 道徳的概念へと救出すべし

「平和」と戦争とを問はず、その上にそれれが奉仕する理念の究明こそ何より大事。

「平和の果てにあるユートピア思想」といふ文明と

戦争し得るものは戦争によつて養はれた人間の

生れと剛毅の精神であり、かうした精神が

存在することゝ平和もまた守るに値するものとならう。

○ 恒存の言はんとする事

すべての道徳的言を単なる物理や生理の

この事ほど人間の物への轉落を如実に示すものはない

人間の物への轉落は自由そのものを外在化し、生その

ものを目的化した事に端を発した。生の価値は

生そのものを伸張としなければ、出てこない。

つまり「平和より自由を」といふ時、それは死の

恐怖から自由を意味してゐるのであり、それは極く

まともな常識に過ぎぬとはいふ。